



大自然の魔法師アシュト、 廃れた領地でスローライフ7

α L P H H L I G H T

さとう
Satou



アルファライト文庫 

ルミナ
黒猫族の少女。
気ままな性格で、
トラブルを起こす
こともしばしば。

コンパ
アシュートの魔法で
生まれた心優しい
樹木の巨人。

ミュア
銀猫族の少女。
一人前のメイドさんを
目指して修業中。

?????
この癒し系
超絶美少女の正体は
いったい——!?

フレキ
薬師のタマゴとして
アシュートの弟子になった
ワーウルフ族の少年。

エンジュ
自由奔放なダーク
エルフの薬師。フレキに
ちょっかいを出しがら。

フィルハモニカ
透き通った翼を持つ
ハイビクシーの少女。
特技はシロップ作り。

アシュート
本作の主人公。
魔法適性が「植物」だった
ために家を追放され、
魔境オーベルシュタインの
領主となる。

主な登場人物
CHARACTERS

第一章 薬師エンジュと一緒に

ダークエルフの里を訪れて、彼らの神木イルミンスールを病から救った俺、アシュト。彼らと交易を始めたことをきっかけに、ダークエルフのエンジュを緑龍の村に招くことになった。

住人としてではない。薬師として、俺の助手として、また俺の知らない技術を教えてくれる講師として、留学という形で来てもらう。衣食住はこちらで手配し、薬院で働いてもらうことになる。

すると、ダークエルフの姉弟、フウゴとライカがこう言いだした。

「オレも行きたい!!!」

「ウチも行きたい!!!」

「ダメや!!」

彼らは、親でありダークエルフの里長であるアラシさんとイナズマさんに懇願したが、やはり許可はもらえなかった。まあ、狩りで深追いして魔獣に連れ去られたのだから、親としては行かせたくないだろうな。しばらくは目に届くところに置きたいだろうし。

でも、アラシさんはこんなことを言っていた。

「まあ、アシユト村長の村に遣いを出すこともあるやろ。その時はお前らに任せられるかもしれん」

「ほ、ほんまに？　なあ父ちゃん!!」

「もちろん、お前らだけやない。手練れのダークエルフも一緒にやで」

「父ちゃん……おおきに!!」

「ライカ、あんたも無茶せんといてや……女の子なんやから」

「わかってる。おおきに、母ちゃん」

ということとで、ダークエルフの里とはいい関係を築けたと思う。

具体的な交易は今のところないが、珍しい魔獣の肉や、ダークエルフの里にしかない山菜などをお土産にくれた。

そして現在。俺は、ダークエルフの里の入口で、大ムカデのセンチに荷物を積んでいる。

お土産や、エンジュの荷物などだ。大事な薬品もあるので慎重に積んでいた。

荷物を積み終え、俺は里長に挨拶する。

「お世話になりました。それと、これからよろしくお願いします」

「こちらこそ。イルミンスールの恩人に感謝を」

アラシさんと握手すると、フウゴとライカが前に出た。

「また来てや、村長。それと、オレもそっちに遊びに行くわ」

「ああ。待ってる。もう魔獣に捕まるなよ」

「へへへ、おおきにな」

「村長、エンジュのことよろしゅう頼むで」

「わかった。ライカも元気で、また来いよ」

思えば、この姉弟がイルミンスールを巡る騒動の発端だった。

別れを済ませ、センチに乗る……すると。

『ビッヒイイイイインッ!!　ブルルルッ……』

どこかで、馬が……いや、神木を守護するユニコーンが鳴いた。

ダークエルフたちも驚き、イルミンスールの方角を向く。どうやら、ユニコーンなりの

別れの言葉らしい。

俺は嬉しくなり、叫ぶ。

「ありがとうございます!!　何かあったらいつでも呼んでください!!」

ダークエルフたちは採み手しながら頭を下げた。ダークエルフ流の挨拶なんだが、成金商人が採み手しているようにしか見えななんだよなあ。

センチが走りだし、俺とエンジュは手を振った。

エンジユは、俺に向かって笑いかけながら言う。

「緑龍の村、楽しみや!!」

「こことは全然環境が違うからな。それと、俺の弟子もいるから仲良くしてくれよ」

「弟子? どんな子や?」

「ワーウルフ族だ。フレキくんっていう弟子なんだけど、もう立派な薬師だよ」

「ほお……兄弟子やな」

「ま、まあそうなるのかな? でも、俺もエンジユから教わりたくないことあるし、俺やフレ

キくんもエンジユの弟子になるってことか……?」

「細かいことはええやん。とにかく、兄弟子がいるってことやな」

「……まあいいか」

センチは、来た時より速度を落として走っている。乗り物酔いする俺もそこそこ慣れてきた。

「ご主人様、お茶です」

ダークエルフの里への旅に付いてきてくれた、銀猫族のシルメリアさんがお茶を勧めてくる。

「お、ありがとう」

「アシユト、気分は大丈夫?」

俺を氣遣ってそう声をかけてきたのは、龍人のローレライだ。俺の結婚相手の一人でもある。

「ああ。ローレライは平気か?」

「ええ。そうだ、これ見て。ダークエルフの女の子からアクセサリーをもらったの。みんなへのお土産よ」

ローレライは、骨や魔石を組み合わせたブレスレットや首飾りを、綺麗な箱から出して見せてくれた。どれもすごい装飾で美しい。

「ダークエルフの装飾品もなかなかのものやろ? 狩猟部族だけど洒落はするねん」

「ええ。とっても素敵だわ」

ローレライも、エンジユとすっかり打ち解けた。

シルメリアさんは揺れる中で器用にお茶を淹れてくれるし、サラマンダー族の護衛役のグラッドさんとバオプウさんは、センチの頭と尻尾の最後部に立って見張りをしてくれている。すごい安心感だ。

こうして、ダークエルフの神木イルミンスールを修復する冒険は無事に終わった。新しい薬師のエンジユを招き、村はますますにぎやかになるだろう。



数日かけて、緑龍の村に着いた。

センティが入口に到着すると、門番をしていた木の巨人ファンバと、同じく木人のベヨーテが出迎え、エンジュを仰天させた。

護衛を務めてくれたグラッドさんとバオブウさんにお礼を言い、荷下ろしをお願いする。あとで酒樽を何個か届けさせるか。

エンジュは、村をキョロキョロ見て言う。

「おおお……ここが緑龍の村」

「改めて、これからよろしくな。つと、シルメリアさん、空き家ってあったかな？」

「はい。入居者がいない住居は残っているはずです。すぐに入居の準備をします」

シルメリアさんは仕事モードになり、経理担当の闇悪魔族、ディアーナの元へ。空き住宅の確認をしてから俺の家へ戻るようだ。ダークエルフの里ではずっと接待される側だったから、仕事がしたくてしょうがないみたいだな。

「ローレイ、今日は帰ってゆっくりするか。エンジュ、俺の家でお茶でも飲もう。みんなに紹介したいし、ささやかだけど家で歓迎会を開くからさ」

「おおきに!! でもでも、先に薬院を見せてくれんか? うち、村長の仕事場が気になる

ねん」

というわけで、薬院に行くことに。たぶん弟子のフレキくんもいるはずだ。

村を散歩しながら自宅へ戻り、ローレイと別れて薬院へ。すると、フレキくんが分厚い本を広げて何かメモを取っていた……ほんとに真面目だな。

「あ、師匠!! お帰りなさい!!」

「ただいま。何か変わったことはあった?」

「いえ、特に何も。あ……エルミナさんが飲みすぎで顔色が悪かったので、胃薬を処方しました」

「あいつ……と、留守をこくろうさま、フレキくん」

「いえ。つと……そちらの方は?」

エンジュは薬院をキョロキョロ見回し、フレキくんの勉強机を見てにっこり笑った。

「はじめまして。うちはダークエルフのエンジュ!! 今日からアシウト村長の元で薬師の勉強をすることになったんや。よろしゅうな!!」

「え……?」

「えつと、説明するよ」

フレキくんに、ダークエルフの里での経緯を話す。

「……ってわけで、俺もフレキくんもエンジユから教わると思う。薬師としての腕も確かだし、これから一緒に勉強していこう」

「なるほど……あ、ボクはワーウルフ族のフレキです。よろしくお願いします!!」

「ん、よろしゅうな!! それと、うちのことはエンジユでええで。うちもフレキって呼ばせてもらうわ」

「え、あ、は、はい」

「敬語もいらん。歳としも近ちかそうだし仲良くしようや、フレキ!!」

「あ、う、うん……」

「おお……エンジユ、グイグイ行くな。」

フレキくんは、同じワーウルフ族のマカミちゃんに想おもいを寄せられている。

もしかして、マカミちゃんにライバル登場、なんてね。

「フレキくん、今日はエンジユの歓迎会をやるから、アセナちゃんを連れてきて。あとでお土産も渡すから」

「は、はい!!」

「アセナ?」

「ぼ、ボクの妹です」

「へえ……うち、一人っ子だから妹とかええなあ。なあなあ、フレキの家に行つてえ

え? アセナって子に会いたいわあ」

「ええと……いい、いいよ」

「んふ、ありがとな!!」

うーん……フレキくん、まんざらでもなさそうだ。

マカミちゃんもここに呼んでみようかな……なーんてね。

第二章 エンジユのホルモン焼き

エンジユが働き始めて数日。

彼女は魔獣の解体場に足を運はこぶようになり、魔犬族まけんの男三人に解体の指導をしながら、薬草の勉強や血肉を使った薬の精製法を、俺とフレキくんフレキに教えていた。

現在、俺とフレキくんは、解体場でエンジユの授業を受けている。

解体された大きなクマ魔獣の胃を取り出し、血濡ちぬれのまま持つて解説する。

「これが『クマノイ』やで。乾燥かんそうさせるとカッチカチになつてな。細かく一口サイズにして舐なめると腹痛に効くんや。めっちゃ効くけど……めっちゃや辛い」

「クマノイ……初めて聞いた」

「ボクもです。勉強になる」

俺とフレキくんはメモを取りながらエンジュの授業を聞く。

解体場では、魔犬族のベイクドさんが、解体した魔獣の内臓を大きな壺つぼに入れて捨てていた。ちなみにこの壺、センチイのエサ入れであり、解体後の内臓はセンチイが喜んで食べている。一度内臓を食べる姿を見たが、内臓をグチャグチャ咀嚼そしゃくする巨大なムカデという存在に恐怖しか感じなかった。

だが、エンジュは顔をしかめて壺を覗き見る。

「勿体ないなあ〜……こんな宝の山、捨てるなんて。それに、内臓だって食べるんやで？」

「サラマンダー族とかデーモンオーガ一家は食べる時もあるけど、基本的には全部捨ててるぞ」

俺が言うと、エンジュは首を左右に振った。

「オークの腸とかめっちゃ美味いの……勿体ないわあ」

「腸、ですか……」

フレキくんの顔が引きつる。内臓系が苦手らしい。ワーウルフ族ではかなり珍しい部類で、彼の狩りが苦手な原因の一つだ。

エンジュは、フレキくんが気に入ったのか、グイグイ行く。

「なんやフレキ。食わず嫌いはダメやでえ？ なんなら、うちが美味いオークホルモン

を食わせてやるで？」

「え、いや、あの」

「んっふふ、可愛ええなあフレキは。なーんか守ってやりたくなくて」

「ぼ、ボクは男だ!!」

「知つとる知つとる。うちな、強い男よりも守ってあげたくなる子が好きやねん。守ってあげたくなる子が『漢』を見せる瞬間も好きやねん……どうや？」

「どどど、どうやと言われても……すすす、好きって、好きって……あうう、師匠」

フレキくん、こつちに振らないでくれ。俺はクマの内臓観察で忙しい。

フレキくんの腕を取るエンジュ。おいおいエンジュの奴、胸を押し付けてるぞ。純情少年フレキくんに、ダークエルフのそういう無自覚な距離の近さはやばい。

エンジュは、フレキくんが気に入ったようだ。

フレキくんが線が細く守ってあげたくなるタイプというのは俺も同意する。狩りで生計を立てる屈強くつぎやうなダークエルフには、その手のタイプがいなかったらしい。なので、緑龍の村に来てフレキくんを見て喋った瞬間、気に入ったようだ……恋、なのかは知らん。

「よし、今日はオークホルモンを食べようや。ちよっど材料もあるし、村長もどうや？」

「え」

「その魔犬族三人もどや？」

「「え？」」

魔犬族の三人というのは、バイクドさん、アルノーさん、ゲイツさんのこと。影が薄い
と本人たちは気にしているが、この村の魔獣解体を一手に担っている大事な人たちだ。

バイクドさんは、バルギルドさんが狩った豚魔獣のオークを解体し、肉を冷蔵庫に入れ
たあと、内臓を壺の中に入れていく。

エンジュは、壺に手を突っ込み、オークの腸を掴んだ……ぐおえ。

「オークの腸は美味いんやで？ うちらは『ホルモン』って呼んどる」

「ほるもん？」

「放るモンでホルモンって意味や。捨てる部位やからね。昔、不猟が続いた頃、苦肉の策
で魔獣の内臓を食ったのが始まりと言われとるんよ。しかも美味くてなあ……ユニコーン
様も大喜びだったそうや」

「へえ……古い歴史があるんだな」

「そうやで。じゃあさっそく準備や!! 村長、ここにバーベキューコンロあつたはずや
な？ 持ってきて!! フレキはうちと腸を洗いに行くで!! 魔犬族の男三人は飲みモンと
食器の準備や!!」

「「「は、はいっ!!」」」

エンジュの勢いに押され、俺たちは作業を開始した。

エンジュに言われた作業をしていると、罨わなの確認からデーモンオーガ組が帰ってきた。
手ぶらということは、成果がなかったのだろう。

デーモンオーガ組以外にマカミちゃんがいる。そういえば最近、彼らと狩りをしてるん
だけ。

「あ、村長!! 何してんの？」

「バーベキューコンロ？ あ、肉食うの!? おれも食う!!」

デーモンオーガのバルギルドさんの娘、ノーマちゃんとその弟のシンハくんが、武器を
置いて俺の元へ。

同じくデーモンオーガのディアムドさんの娘であるエイラちゃんを抱っこしたマカミ
ちゃんと、エイラちゃんの兄キリンジくんもあとに続く。

「おにーたん!!」

「こんにちは、エイラちゃん。マカミちゃんたちも」

「こんにちは!! で、何するんですか？ お肉ならあたしも食べたいっ」

「肉……いや、内臓かな？」

「は？」

マカミちゃんが「は？」って顔になる。

キリンジくんは、魔犬族がテーブルと飲み物を準備している姿を見て口を開いた。
 「あの、肉は全て冷蔵庫に移動させましたし、罨には何もかかっていませんでした。もしオレたちの成果を期待していたなら……」

「ああ違う違う、もうすぐ戻って……」

「おーい、準備できたー?」

「……あ、帰ってきた」

元気良く手を振りながら戻ってきたのは、エンジュとフレキくんだ。なんかフレキくとエンジュの距離が近いな。

下ごしらえをしたのか、桶おけにはオークの腸を細かく切ったものがこんもりとある。

「あ、マカミ。おつかれ」

フレキくんがマカミちゃんに挨拶した。

「……………どーも」

うっげえ、マカミちゃん、フレキくんが知らない女子といるから引きつった笑みを浮かべている。なんか怖い……でも、フレキくんはマカミちゃんの不自然な様子にまったく気がついてない。

「んふふ……フレキ、さっそく仕事やで。こつちこつち」

「わわっ、ちよ、引っ張らないでよ」

「はいはい。こつちこつち」

エンジュがフレキくんの腕を引っ張り、いい感じに炭が焼けているパーベキューコンロへ向かう。

すると、バルギルドさんとダイヤモンドさんが俺の元へ。

「……村長、これは?」

「何事だ……?」

「えーと、ダークエルフの薬師エンジュが、魔獣の内臓の食べ方を教えてくれるそうです」

「魔獣の内臓? 以前食ったが……あまりいいモノではない」

「同感だ……」

バルギルドさんが渋い顔をして、ダイヤモンドさんもウンウン頷いた。

すると、エンジュが言う。

「あんたら、内臓食ったことあるんやろ? 不味い理由は簡単、下処理がヘタクソだからや。いいか、内臓はよく洗浄せなあかん。きれーに洗えばこーんなに白くなるんや」

確かに、下処理したオークの腸は白くなっていた。

エンジュの指示により、フレキくんが熱くなった網あみの上にホルモンを落とす。すると、ジュワアツといい音がした。それだけじゃない、最初はドロドロとしてた内臓が火で炙

られたことにより、表面が茶色く、硬くなり、いい匂いがしてきたのである。

エンジユは、懐から黒っぽい液体の入った瓶を取り出す。

「これはダークエルフ族に伝わる秘伝のタレや。これを付けて食うとめっちゃ美味いで!!」

エンジユは小皿にタレを入れ、俺に渡す。

黒い、ドロドロした液体だ。ゴマが入っており、しょっぱい匂いもする。

「ん……ええ感じや。フレキ、肉を村長に」

「お、ありがとう」

茶色く、少し焦げ付いたオークの腸……ホルモンを、俺の皿に。

ここまで焼けると嫌悪感はない。むしろ美味そうに見える。

全員が注目する中、俺はタレを付けてホルモンを口の中へ……

「あつふ、あふっ……う、うんまつ!!」

「そうやるそうやる? 美味しいやろ?」

「ああ!!」

美味かった……タレとホルモンがめっちゃ絡みつく。

ホルモンの肉汁とタレが合いすぎてヤバイ。なにこれ革命じゃん。

他のみんなもさっそく試食。

「う、うんめええっ!! ダークエルフの姉ちゃんすげえ!!」

「おいしいっ!! エンジユだっけ? あんたすごい!!」

シンハくとノーマちゃんが絶賛している。

「美味い……」

「おいしー!! おにーたん、おいしいね!!」

キリンジくとエイラちゃんも美味しそうに食べている。

「美味い」

「ああ、美味い」

バルギルドさんとディアムドさんは静かに驚いていた。

「美味しいわね……ねえアーモ」

「ええ。お酒が欲しくなるわ」

ディアムドさんの妻ネマさんと、バルギルドさんの妻アーモさんも気に入ったようだ。

「みなさん、こっちに飲み物を用意します!!」

バイクドさんたち魔族が飲み物をみんなに回してくれた。

「……お、おいしい」

ホルモンを食べて驚きの声を上げるフレキくんには、エンジユがグイグイ近寄る。

「そうやる? ねえねえフレキ、どうや? おいしい?」

「うん、おいしい。ダークエルフの知識はすごいよ!!」
 「んふふ……もっと褒めてもええんやで?」

「あ、あの、ちよつと近い」

その時、怒り顔のマカミちゃんがフレキくんに怒鳴る。

「ツぐぬぬぬ……フレキ、デレデレすんな!!」

「し、してないよ!!」

「ぬふふ」

マカミちゃんにエンジユ、二人はいいライバルになる……かな?

それにしてもこのホルモン、村に広めたいな。ハイエルフとかサラマンダー族、エルダードワーフたちが喜びそうだ。



数日後、エルダードワーフの間でホルモン焼きがブームになった。

ハイエルフは肉が大好きな種族だが、ホルモン焼きはどうも無理らしい。だが、エルダードワーフの職人たちは『こりゃ酒に合う、素晴らしい!!』とか言つて、ホルモン焼きをする専用の建物を建築する許可を俺に求めてきた……別に断る理由はないからいいけ

ど、専用の建物つてなんだ?

それからさらに数日後、ドワーフたちが多く住む一画に、木造の大きな平屋が完成した。中に入ると、四人掛けの椅子テーブルがいくつも並んでいる。テーブルも普通とは違い、中央がくぼみ、耐火煉瓦で覆われ、中で炭が燃やせるようになっていた。その上に網を載せ、座ったまま焼きものができるように工夫されている。しかも、各テーブルの天井には煙突が設けられており、煙対策もばっちりだった。

エルダードワーフのアウグストさんは自信満々に言う。

「どうよ?」

「……えっと、どうと言われても、ホルモン焼きの建物ですよね」

「おう。家の中で炭を炊くと銀猫の嬢ちゃんたちが睨むからよお。外でやると洗濯物に匂いが付くとか不評だし……だったら、専用の建物を造つちまえばいい。バルギルドに頼んで魔獣の内臓は専用の冷蔵庫に入れてある。それに、銀猫たちはエンジユの嬢ちゃんから内臓の処理を教わってるから調理は任せて大丈夫みてーだしな!!」

「そ、そうですか……」

「がっはっは!! いい酒のつまみができたぜ!!」

酒に対する行動力半端ないな……まあ、いいか。

こうして、村に新しい建物が増えた。

その名も『ドワーフホルモン亭』。ホルモン焼きと酒を楽しむ、ドワーフたちの憩いの場所だ。

エンジュから内臓の下処理を習った銀猫たちが調理を担当し、今まで捨てるしかなかった魔獣の内臓がドワーフたちの胃に収まることになる。

さすがエンジュ、魔獣のことにかけてはプロだ。バルギルドさんやディアムドさんも、魔獣には詳しくはなかったけど、エンジュには敵わない。豚の魔獣であるオークの『舌』を焼いて食べるとコリコリして美味いなんて、エンジュが来るまでは考えたこともなかった。

ドワーフたちだけでなく、サラマンダー族とかにもホルモンは好評だった。

ハイエルフと銀猫族はイマイチみたいだけど。特に銀猫たち、調理は楽しいけど食べるのはあまり好きじゃないみたい。

ま、俺はけっこう好きだけだね。ホルモン。



「……ってわけで、エンジュのおかげで毎日ホルモンが食べられるようになったんだ」

「なるほど……はあ〜」

「……あの、フレキくん、エンジュが苦手？」

「……………ははは」

な、なんかフレキくん、乾いた笑いだけど。それにちよつと疲れてるような。どうやら、エンジュに懐かれて大変らしい。

「エンジュの知識は素晴らしいです。魔獣の内臓処理や製薬方法、薬草に対する知識にも貪欲で、ボクや師匠に質問しない日はありません。でも……ちよつとスキップが多いというか、抱きついてきたり胸を押し付けてきたり……はあ」

「そ、そうか」

確かに、エンジュは勉強熱心だ。

図書館に通って薬学の本を読み漁ったり、俺が教えることは全てメモを取ったりしている。村に来て教週間経つけど、メモだけで本を一冊出せるだろう。

「フーレーキッ!! 温室に行くで〜っ!!!」

「ひいっ!?」

エンジュが診察室に入ってくると、フレキくんが悲鳴を上げた。

「もお、乙女の顔見て『ひいっ』は酷いやん。あ、村長、フレキ借りるで〜」

「どうぞ」

「ちよ、師匠!?!」

「ごめんフレキくん、俺は無力だ……」



「ししょおおおおっ!?」

「さ、行くでフレキいっ♪」

「ああああ……師匠の裏切り者おおお……」

フレキくんはエンジュに引きずられていった……ごめん、今夜一緒にホルモン焼きでも食べよう。

フレキくんがエンジュに連れていかれたので一人になる。さて、せっかくだし……あれで遊んでみるか。

「ふっふっふ……」

俺は、隠し棚かくしだなに収納してある『ユニコーンのツノ』を一本取り出す。

ダークエルフの里にある神木イルミンストールの守護獣ユニコーン。イルミンストールの治ち療りょうのお札にツノを十本以上もらった。一本一本が俺の腕より太く、俺の足より長い。

「さて、とりあえず先っぽかな……」

のこぎりで先っぽを切り落とす、手のひらサイズの大きさにして、残りは片付ける。

「ふむ……石、いや砥石といしみたいな質感だな。匂いは無臭」

ペロッと舐めるが味はなし。スライム製のシャーレに置き、『緑龍みどりりゅうの知識書』を開いてみる。

 ○ユニコーンのツノ

神木イルミンスールの守護獣のツノ。

何度でも生え変わわり、自分の意志で生やすことも可能。

霊薬エリクシールの素材の一つで、単体では利用価値がない。

エリクシールの素材と合わせることで、その真価を発揮する。

ふふふ、舐めても味しないでしょ？ 残念でした〜

「つく……シエラ様、俺の行動をお見通しみたいなセリフだ」

この本、たまにシエラ様……緑龍ムルシエラゴ様の感想みたいな説明文が入るんだよな。

つまり、エリクシールの素材が揃わないとだめか。

残りの素材は二つ。

《エリクシールの材料》

・マンドレイクの葉『済』

・アルラウネの葉『済』

・大樹ユグドラシルの枝『済』

・オリハルコンの鍋『済』

・ユニコーンのツノ『済』

・賢者の石『済』

・ソーマ水

・古龍の鱗

あと二つ……どこで手に入れられるのかまったく想像がつかないな。

ユニコーンのツノを入手したのも偶然みたいなもんだし、どこで見つけられるか考える

ことは難しい。

『緑龍の知識書』を開けばわかるけど……それじゃつまらない。せつかくだし、自分の手

で見つけて、調べてみたい。

辛い、俺の人生は無限に近い。目指す先があるというのは実に楽しい。

「エリクシール……か」

霊薬エリクシールの調査。

考えただけでワクワクする……ふふ、薬師の夢だな。
さて、妄想はおしまい。フレキくとエンジュの様子でも見に行くかな。

第三章 アシュトの悪戯

エンジュが村に馴染んで女子会にも参加するようになったある日、俺は悪魔商人デIMITリの館の支店長リザベルと談笑していた。

「で、村長。いつになったら新婚旅行に向かうのですか？」

「う、うんん……ミユディたちも最近忙しいようだからなあ。結婚してから趣味も増えたみたいだし、旅行はしばらく先になるかも」

幼馴染のミユディをはじめ、俺には複数の結婚相手がいる。彼女たちはこの頃、新しい趣味を見つけているんだよな。

まずミユディは、編み物だけじゃなく絵を描くようになった。どうやらデザインの勉強を兼ねてるらしい。ドワーフに画板を作ってもらい、風景画にも挑戦している。

ローレイは、読書だけじゃなく執筆もするようになった。もともと文学好きということもあり、いつかは挑戦してみたいと言ってたけど、結婚してから本格的に書き始めたら

しい。どんな作品かはまだ秘密みたいだ。

ローレイの妹クララベルは、料理を習っている。シルメリアさんからお菓子作りを習い、子供たちに試食してもらっている。最初は焦げたり硬かったりしたが、最近は美味しいクッキーが焼けるようになった。次はケーキに挑戦したいとか。

ハイエルフのエルミナは、オリジナルブレンドの酒を造るようになった。

果実酒を自分で造り、まったく未知の酒も醸造しようと研究している。最近はコメから酒が造れるかもしれないと研究を重ねていた。

あと、俺の妹のシエリーは、魔法だけじゃなく剣術も習うようになった。もともと身体を動かすのが好きだったし、アスレチックで遊んだり龍騎士の訓練に交ざっている。

「……ってわけで、みんな趣味に燃えてる。毎日楽しそうだし、もう少し落ち着いてからでもいいかなーって」

「なるほど。それで、どこに向かうかは決めたのですか？」

「ああ、天使の国か悪魔の国か……そーいや最近、デIMITリとアドナエルを見ないな」

「一応、会長と社長ですからね。特にデIMITリ会長、最近はずいぶん忙しい」

闇悪魔族のデIMITリと熾天使族のアドナエル、種族は違えど二人ともああ見えて偉い立場だもんな。性格はアレだけど。

「それより村長、本日は何をお買い求めですか？」

「はあ〜……そうだな、珍しいカーフィーとかないか？」

「では、こちらの『カフィー・アルク』などいかがでしょう。ベルゼブでも数年に一度しか味わえない高級品です」

リザベルは、高そうな装飾が施されたカーフィー缶をカウンターに置く。

高級カーフィーはいくつか自宅にあるけど、これは初めて見た。

「高級か……どんなカーフィーなんだ？」

「はい。魔界都市ベルゼブに生息する『ジャリンコ・ニャンコ』の体内で熟成された特別なカーフィーです。こちらは、ジャリンコ・ニャンコに高級カーフィー豆を食べさせ、体内で熟成させてから排出されたものを、そのまま缶に詰めたものです」

「………おい、そのまま排出されたものだったって？」

「はい」

「………それって」

「おーっと村長、それ以上はダメです」

食欲がなくなる話だ。

体内で熟成って、要は魔獣に食べたカーフィー豆だろ。ジャリンコ・ニャンコとかいう魔獣は聞いたことないし、もしかしたらベルゼブの固有種なのかも。

うーん、こいつにはやられつばなしだし、ちよいと悪戯を仕掛けてみるか。

「よし、買った!!」

「うわ……ありがとうございます」

「おい、『うわ』ってなんだ『うわ』って」

カーフィー豆を包装してもらい、代金を支払う。さて、ここで俺の一言。

「リザベル、今夜はヒマか？」

「………はあ、不倫のお誘いですか。節操ナシとはこのことですね。早くも妻の身体に飽きたということですか」

「違うっつもの。いつもの夕食会だよ、お前もたまには来いよ」

「……構いませんが、私に夜の期待をしても無駄ですからね」

こいつ、ホントに俺をからかうのが好きだな。

ちなみに、夕食会とは、定期的に住人を俺の家に呼んで開催する食事会だ。住人とのふれあいや、村の改善点なんかを、食事しながら聞くのが目的だ。

リザベルも何度か招いたことはあるけど、最近は来ていないからな。

さて、さっそく準備するか。



自宅のダイニングルームに呼んだのは、エンジュとリザベル、エルダードワーフのラーバンさん、そしてハイエルフのシレーヌとエレインだ。あと、タイミンクよく帰ってきたエルミナも夕食の場に同席した。

食事も終わり、ワインを飲みながら村の改善点や要望を聞く。

「そーだなあ……鍛冶組かじとしては文句ねえ。素材は豊富だし環境も最高だしな。仕事も捗はかるってもんよ」

そう言ったのはラーバンさんだ。

「最近、マーメイド族やデIMITリ商会にも金属製品を卸おろしていますけど、人手とかは足りてますか？」

「ああ。ドワーフ仲間もわんさと移住しに来とるし、鍛冶をしてみたいっっちゃう悪魔族アクマールやワーウルフ族の連中もいる。問題はない」

農園の手伝いで来た悪魔族アクマールが村を見学した際に、鍛冶場を見て興味持った人が何人かいたんだよな。それから悪魔族で鍛冶をしたいつて人が何人か頭を下げて来て、ラードバンさんたちに弟子入りしたんだっけ。とりあえず、鍛冶組は問題ないな。

「シレーヌ、ハイエルフの農園はどうだ？」

「んー、あたしにも問題ないわ。収穫組しゆわくぐと加工組も仲いいしね。最近は仕事の合間に女子会が開かれてるし」

「そ、そうなのか？」

「うん。お菓子持ち寄ったり、みんなでお弁当作ってきておかず交換したり……ま、エルミナが言い出したんだっけね」

「ちよ、シレーヌ!!」

シレーヌの言葉にエルミナがあたふたとしだした。

「へえ……まさかと思うけど、酒は飲んでないよな？」

「あ、あ、当たり前じゃん!! さすがに仕事中は」

慌あわてた様子のエルミナに、エレインが首を捻ひねりながら言う。

「あれ？ エルミナちゃん、前に試作品のお酒を——」

「わーわー待った!!」

「わっぶ!!!」

エルミナがエレインの背後に回り、慌あわてて口をふさぐ。だがもう遅おそい。

「ほお……仕事中に酒をねえ」

「いや、その……ちよ、ちよっただけ、私の作った試作品を試飲して……」

「まったく……ともかく、仕事中はダメ。酒好きのドワーフだって、仕事中は絶対に飲まないんだからな」

「そりゃそうだぜ!! 仕事が終わってひとつ風呂浴あびて飲むからこそ酒は美味いんだ!!」

ラードバンさんがガハハと笑う。エルミナは反省したのか、エレインを離して席に座った。

残りはエンジュとリザベル。

「うちは来たばかりだし不満はないで〜」

「リザベルは？」

「私も特にありません」

「そうか……じゃあこんなところか。何か要望があったら遠慮なく言ってくれ」

俺はそう言うのと、シルメリアさんに食後のカーフィーとデザートを頼む。

ラードバンさんが甘いものをあまり食べないので、甘さ控えめのクッキーとカーフィーを出した。

俺はクッキーを齧り、カーフィーを飲みながらシレーヌに聞く。

「シレーヌ、明日の天気は？」

「晴れ。しばらくはいい天気が続くと思う」

「そっか。じゃあ明日は森に葉草採取でも行くか。エンジュ、いいか？」

「もちやで!! フレキも一緒やる?」

「ああ。護衛にマカミちゃんとノーマちゃんも連れていくか……」
こうして、夕食会は穏やかに過ぎていった。

夕食会が終わり、みんなが家に帰ろうと立ち上がる。

俺は玄關でリザベルに聞いてみた。

「リザベル、今日の夕食会はどうかだった？」

「ええ、とても楽しかったです。食事も素晴らしく、話の内容も分かりやすく」

「そうか、で、何が美味しかった？」

「そうですね……やはりスープカレーが美味しかったです」

「デザートは？」

「デザート? ああ、食後のクッキーとカーフィーですか。なかなか美味しかったです」

「そうか……奮発したかいがあったよ」

「え？」

俺はちよつとだけ意地悪に微笑む。

「リザベルに出したカーフィー、昼間に買った『カフェ・アルク』なんだよなあ……お前には世話になってるから、一人だけ高級カーフィーを出したんだけど……美味かったんだな?」

「……………」

「ちよつとしたサブプライズさ。どうだった?」

「……………」

「えと、どうだった？」
「……………」

な、なんかりザベルが笑顔のまま凍^{こお}ってる……………こ、怖い。
あれ、もしかして……………やっちゃったか？

「村長。今日は素晴らしい食事会、誠にありがとうございました。この借りは必ず返します……………今度、私の家で食事などいかがでしょう。もちろん、朝まで……………ね？」
「っひいっ!？」

この日ほど、リザベルの笑顔に恐怖したことはなかった……………

第四章 エルミナの悩みと不^ふ穏^{おん}な影

「うゝん……………」

「エルミナ、何してんだ？」

「あ、アシュト」

ある日、借りていた本を返しに図書館へ行くと、エルミナがウンウン唸^{うな}っているのを見つけた。

声をかけると、疲れた目で俺を見てため息を吐^つき、再びウンウン唸^{うな}る……………おい、何これ、俺ってばなんかした？

テーブルはもちろん、床にまで本を積んでいる。エルミナが読書するのは知ってたけど、図書館で読んでいるのは珍しいな。

「なにに……………『美味いワインの作り方』に、『わしの飲んだ酒ゝジグベッグと酒の道ゝ』って……………酒の本か」

「アシュト、甘い飲みたい」

「えゝ……………取ってこいって？」

「うん。のど渴^{かわ}いた」

疲れているようだ……………仕方ないな。

俺は借りた本を返却し、ドリンクカウンターでカーフィーとブドウ水をもらい、エルミナの元へ。ブドウ水を渡すと、さっそく飲み始めた。

「ぶっはあ……………おいしい!!」

「少しは元氣出たか？ で、何を悩んでたんだ？」

「うん、あのね……………研究が行き詰まっちゃって……………疲れたの」

「研究？ ああ、コメから酒を造^つれないかってやつか」

「うん……………いけそうな気がするんだけど、さっぱりでね……………」

最近、エルミナはコメから酒が造れないか考えている。

コメを嘔むと甘くなり、嘔み続けると酒っぽい風味が出たとか言っていて、いろいろ組み合わせれば酒ができるかもしれないと興奮していたな。ワイン、ウイスキー、セントウ酒とは違う、まったく新しい酒を造る。そう言っていて、最近のエルミナは研究に没頭していた。

果樹園の仕事を休み、空き家の一つをいつの間にか研究室に改造して、実験を繰り返している。酒に対する執念しつねんすげえ。

「うーん、何か手伝えることあるか？」

「マッサージして……」

「なんだそりゃ……まあいいけど」

俺はエルミナの背後に回り、肩を揉んでやる。

うわ、バキバキだよ……どれだけ研究に打ち込んでるのかわかる。この肩は酒に対する執念の表れだ。

「ふああ……きもちいいい」

「寝るなら家で寝ろよ。それと、あんまり無理すんな。酒ならたくさんあるんだし、お前が身体を壊したら元も子もないだろう？」

「んん……でも、お酒造りたい」

「それはいいけど、無理するなっつことだ。お前が倒れたら、俺はもちろん、みんな心配

する」

「うん……ありがとう」

エルミナはマッサージが気持ちいいのか、眠ねむそうな声で答えた。



酒造りは専門外なので、俺にはよくわからん。

酒好きのエルダードワーフに相談したらと言ったら、『いやよ。これは私が一人で完成させるんだから!!』と言って聞いてくれなかった。あいつ、妙なところで意地っ張りだよなあ。

エルミナは本を抱かかえて出ていった。これから空き家……いや、エルミナの研究室で、コメから酒を造る方法を考えるんだろう。こうなったら手は出さず、好きにやらせることにした。

さて、俺も本を返したし、村を散歩でもするか。

村の一画で、ドワーフたちがキンググシープの牧場の隣に大きな柵を立て、新しい厩舎も作っていた。これは新しい試みの一つである。